**題名が2行にわたる場合、2行目は1行目よりも短くする**

**フォントは明朝15ptボールド**

**（副題は括弧内に記載し、フォントは明朝12ptボールド）**

国際 花子A、育成 太郎B、グローバル さくらC

１　書式

このテンプレート自体が原稿の書式に準じているので、上書きして利用するとよい。ページ設定において、用紙サイズはA4、余白はそれぞれ、左右と上が20mm、下は25mmである。

1.1　文字のフォントとサイズ

題名は、明朝15ptボールドで作成する。副題があれば、副題を括弧内に記載し、フォントを明朝12ptボールドにする。

「国際 花子」などの著者名の右肩に、所属を区別するために記号を、上付きで、1人目からアルファベット大文字（半角）A、 B、 C などと記す。著者名は、姓と名の間に半角スペースを入れて記す。氏名が英語の場合、例えば「夏目 漱石」は、Soseki NATSUMEのように、名姓の順に記す。著者が2人以上の場合は、著者名の間を「，」で区切る。

所属は、原稿作成時に、1ページ目左段脚注に記す。大学の場合は大学名学部名等を明記する。大学名と学部名等の間はあけない。

題名の下の著者名は明朝12ptで記述しする。また、1ページ目左段脚注の所属は明朝9pt、「A: 」などの部分はCentury 9pt、行間隔を最小値0ptで記述する。

本文は、明朝10.5ptで作成する。句読点は「、」と「。」（いずれも全角）を使用する。本文は、2段組、24字×42行×2段で作成する。

1.2　見出しや図表題

「大見出し」は冒頭の「**１　書式**」などを、「中見出し」は「1.1　文字のフォントとサイズ」などを、「小見出し」は「1.3.1　図について」などを、それぞれ指す。見出しには階層に準じた通し番号を付ける。大見出しのみ、数字部分も全角文字で、中見出し、見出しの数字部分は半角である。

-----------------------------------------------

A: ○○大学○○学部

B: ○○（株）教育開発部

C: ○○大学○○○学系

見出しのフォントはすべてゴシックで、大見出しの章番号と章名のみ、ボールドにする。また、見出しの文字サイズは、すべて本文と同じ、10.5ptである。

1.3　図表

図や表は原則として白黒で作成し、本文の該当箇所に埋め込む。本文で、必ず、すべての図および表に対して言及すること。

図や表は、左右2段にまたがってもよい。図や表は鮮明であることが必要である。図題および表題はゴシック、英数字はCenturyで記述する。図や表は、段の最上部あるいは最下部にレイアウトするのがよい。

1.3.1　図について

図題は図の下に付け、図題には通し番号を付ける。原稿中に図が1つだけの場合でも「図1」となる。図注が必要な場合には、図題の下に書く。文中では、初出部のみ図番はゴシックとCenturyで「図1」のように書き、再出部分は明朝とCenturyで「図1」のように書く。図には外枠は付けず、背景色は無色にする。白黒印刷して、読み取りに支障がないことを確認する。

1.3.2　表について

表題は表の上に付け、表題には通し番号を付ける。原稿中に表が1つだけの場合でも、「表1」となる。表注が必要な場合には、表の下部に書く。文中では、初出部のみ表番はゴシックとCenturyで「表1」のように書き、再出部分は明朝とCenturyで「表1」のように書く。

|  |
| --- |
| ・図番および図題は、中央揃えにする。・図題が2行以上になる場合、2行目以降の書き出し位置は、1行目の図題の書き出し位置に揃える。・図番および図題中の英数字は、Centuryで書く。・図の外枠は描かない。・図番には、必ず通し番号をつける。 |

図1　図題は図の下に

※本文と図との間に1行の空行を入れる。

表1　表題は表の上に

―――――――――――――――――――――――

・表番および表題は、中央揃えにする。

・表題が2行以上にわたる場合、2行目以降の書き出し位置を、1行目の書き出し位置に揃える。

・表番および表題中の英数字は、Centuryで書く。

・表番には、必ず通し番号をつける。

―――――――――――――――――――――――

※ 本文と表との間に1行の空行を入れる。

２　全般的な注意事項

2.1　「注」および「引用・参考文献」について

「注」および「引用・参考文献」の番号は、上付きで、該当箇所に、次の要領で記す。

「注」を付ける場合は、本文の該当箇所の右肩に、[1]や [1, 2] または [1-4] のように、両ブラケット内に数字を入れる。「引用・参考文献」は、本文の該当箇所の右肩に、 1) のように、数字の右側のみに右片括弧を付ける。同じ箇所に複数の文献が関わる場合は、1, 2) または 1-4) のように記す。「注」と「引用・参考文献」は、原稿の末尾に「注」と「引用・参考文献」を別々に、「注」、「引用・参考文献」の順に記載する。

　例えば、「注」は、本文中にこのように付ける[1]。また「引用・参考文献」は、このように付ける1)。このテンプレートの末尾に、「注」および「引用・参考文献」の本文の記載例がある。

2.2　対象者の表記、専門用語について

原則として、小学生は「児童」、中学生・高校生は「生徒」、大学生・短期大学生・高等専門学校生は「学生」と表記を統一する。大学院生は「大学院生」でよい。

なお、「グローバル人材」「国際理解教育」など広義概念を指す用語については、原則として、筆者が用語の定義を簡潔に述べる必要がある。

注

[1] 「注」はこのように、本文の末尾にまとめて書く。各ページの脚注にはしないこと。「注」の見出しはゴシック10.5ptボールド、「注」の本文は明朝10ptとする。「注」の本文の行間隔は、最小値0ptとする。「注」の本文の書き出し位置をすべて揃える。なお、「引用・参考文献」の表記は、「注」の表記に準ずる。

[2] 原稿の提出時に、ページ番号を入れないこと。また、最終ページの左段と右段の高さをできるだけ揃える。段の最下行が見出し（章節項番号と章節項名など）で終わる場合は、次の段に送る。

・・・

[10] アラビア数字の標記は、何桁であろうとすべて半角Centuryとする。ただし、章番号とそれに続くスペースについては、全角ゴシック10.5ptボールドとする。また、位取りのカンマは書かない。本文中に使われるアルファベット文字も、前後に記号や数字が何文字連続しようと、すべて半角Centuryとする。括弧内に全角文字がある場合、全角（　）を使用し、括弧内がすべて半角Centuryの英数字の場合、半角(　)を使用する。

引用・参考文献

1) 西山潔, 石原和宏. (2005). 活火山地帯における震源地特定について（第1 報 計算手法の提案）. 火山列島, 50(5), 407-416.

2) Nishiyama, K., & Ishihara, K. (2005). Kakkazanchitai ni okeru shingen tokutei ni tsuite (Dai ippou keisanshuhou no teian) [Specification of earthquake center in active volcano area (1st report, Approach for Calculating Method)]. Kazan Rettou, 50(5), 407-416.

3) Pisciella, P., Pelio, M., & Becker, D. S. (2006). FTIR spectroscopy investigation of the crystallization process in an iron rich glass, Journal of European Ceramics Society, 33(3), 345-351.

4) 岩井實，佐久田博. (2006). 基礎応用 第三角法図学 第2 版. 東京：森北出版．

5) Dörnyei, Z. (2001). Motivation strategies in the language classroom. Cambridge: Cambridge University Press.

6) García, O. (2009). Bilingual education in the 21st century: A global perspective. Malden, MA; Oxford:Wiley-Blackwell.

7) 月本洋. (2008). 日本人の脳に主語はいらない (音声と文字pp. 14-17) . 講談社選書メチエ．

8) Kanno, Y. (2007). ELT policy directions in Japan. In J. Cummins, & C. Davison (Eds.), International Handbook of English language teaching (pp. 63-73). New York: Springer.

9) 三田純義, 松田稔樹. (2005 年5 月). 力学と関連づけた設計入門教材の開発（第1 報）, 日本設計工学会平成17 年度春季大会研究発表講演会講演論文集, 東京理科大学森戸記念館．

10) Murakami, T., Deguchi, M., Jin, Y. (Oct. 2005). Computational methodology of universal design for quantitative user diversity. Paper presented at the 1st International Conference on Design Engineering and Science (ICDES2005), Vienna, Austria.

11) グローバル人材育成教育学会：http://www.j- agce.org/（2013 年10 月25 日参照）

12) Hall, K., & Boomershine, A. (2006). Life, the critical period: An exemplar-based model of language learning. Ms., The Ohio State University. [http://www.ling.ohiostate.edu/\_kchall/KCH, retrieved March 15, 2011]